

(58)はっばビジネス

徳島県勝浦市上勝町は、標高 100m から 700m の典型的な中山間地、面積の 9 割近くが山林、平地は少ない。人口は、1950 年に 6356 人だったが、2007 年には、2049 人と 3 分の 1 に減少。65 歳以上の高齢者の比率は約 48% で、徳島県内の 24 市町村中で高齢化率は 1 位。しかし、現在では、はっばビジネス、高齢者が元気な町として、マスコミでもたびたび取り上げられ、U ターン、I ターンの移住者が増え、人口減少にブレーキがかかっている。

『そうだ、葉っぱを売ろう!』(SoftBank Creative)の著者で、徳島県農業大学を出て、20 歳の時に、上勝町の農協の営農指導員になった横石知二さんが、ある日、大阪からの帰りに、「がんこ寿司」で若い女性が、料理についてきたもみじの葉っぱを、大事そうに持ち帰った姿を見て、“これだ”と、葉っぱを出荷しようと考えたという。

上勝町には、料理の“つま”に使われるもみじ、ウラジロ、笹、南天、青もみじ、ハランなどのはっばを出荷できることがわかり、大阪青果市場をはじめとする全国の青果市場で、取引されることを知る。20 代の若者が、一流料亭に通い、全国の青果市場でどのような葉っぱが取引されているかを丹念に調べ、農協に彩部会を作り、4 軒で始めた事業は、当初(1986 年)116 万円、5 年後には 5700 万円に上昇した。

出荷は、はじめの頃は、村の防災無線放送で、市況が伝えられると、それに合わせて、農家は、特定の葉っぱを収穫して行っていたが、その後、青果市場の市況は、fax で流され、注文を取るシステムに代わった。

こうして、農家は、即座に注文にこたえられる農家のおばあさんが、葉っぱを採取して、農協に出荷するようになった。このシステムはパソコンと情報システムに代わり、農協の彩部会は、「株式会社いろどり」になり、2007 年には、売上高 2 億 6000 万円にまで増え、町の人口の 2 倍の人たちが毎年のように視察するようになった。元気を取り戻した上勝町は、ごみの分別を増やし、ごみゼロに挑戦しているという。自然資源を活用し、高齢者が元気にビジネスに取り組み、地域を活性化する姿は頼もしい。